2018（平成30）年3月発行【第6号】

Gifu Project Network

元気 Genki!ぎふ

特定非営利活動法人 ぎふ・プロジェクトネットワーク

情報誌 Vol.6 2018.03

岐阜県の行政から暮らしまで、役立つ情報が満載！

GIFU42 ぎふ42市町村ネットワーク
www.gifu42.net

表紙は、まつやまたかしさん（岐阜県関市出身）のイラストです。

■発行／特定非営利活動法人ぎふ・プロジェクトネットワーク 〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東１丁目 20 番３号
Tel：058-237-6222 Fax：058-237-7509 E-Mail：info@gifu42.net HP：www.gifu42.net

こだわり抜いたのは、やさしい肌あたり。

FEATHER®

サムライエッジ
SamraiEdge

男性用システムカミソリ

トリプルアクションシェービング
刃があらゆる面に密着し、余分な力を分散することで肌へのやさしさを実現。

アクション1 ヘッドが動く！
アクション2 替刃が動く！
アクション3 刃も1枚ずつ動く！

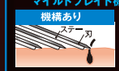
（イメージ）

特許取得 新開発首振り機構

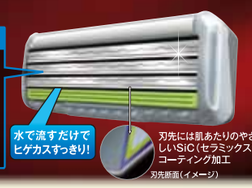
特許取得
アクション1＋アクション2＝新開発 首振り機構
アクション1・アクション2が、同時に機能し、今までにないやさしい肌あたりを実現！

ホルダー　替刃4コ入　替刃8コ入

理容のプロが認めた技術を応用
刃先にかかる圧力を分散させ、肌への負担を軽減させる
マイルドブレイド機構を採用しています。



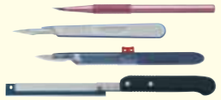
当社は理容業界向け替刃市場でトップシェアです。
サムライエッジの刃は、そこで培った技術を応用しています。



人々の命と健康を守り、人生に潤いを与える美容への貢献を目指して。 *All for Your Smile*

関工場
皆様の暮らしをサポートする、
高品質製品の生産拠点。

日ノ出本部／総合研究所
新たな価値の創造。
皆様の暮らしをサポートします。



美濃工場
医療機器の厳格な国際品質規格をクリア。
世界トップシェアを誇る各種医療機器の生産拠点。

刃物の総合博物館
フェザーミュージアム
装いも新たに、平成28年3月
リニューアルオープン（入館無料）

フェザー安全剃刀株式会社
本　社／〒531-0075 大阪市北区大淀南３丁目３番70号
ホームページ http://www.feather.co.jp/
支店：東京／営業所：福岡・札幌／工場：関市・美濃市／研究所：関市
代表取締役会長 藤田直人
代表取締役社長 岸田英三

9001：メディカル以外
13485：メディカル

特定非営利活動法人ぎふ・プロジェクトネットワークは、「サイト運営」と「情報誌発行」のふたつの活動で、岐阜県の活性化に貢献しています。

1

「お気に入り」に入れて、岐阜県の情報をいつでもご覧下さい。

www.gifu42.net

GIFU42 ぎふ42市町村ネットワーク

■サイト運営

岐阜県の行政から暮らしまで、役立つ情報が満載！

市町村長インタビュー

GIFU42 市町村 NETWORK

平成30年3月1日 現在

Contents

市町村長インタビュー

岐阜県下42市町村の全ての市町村長インタビューを掲載しています。

・市町村HPにリンク
・サポートメンバー（法人会員）の紹介

ぎふの新・見聞録

行政や法人会員企業のイベント、新規事業の立ち上げ情報、新製品の開発情報等の紹介をしています。

調べる・学ぶ・ぎふの市町村

岐阜県をもっと深く知りたい人のための様々な情報を紹介しています。

企画編集 / ぎふ清流ボイス

岐阜県の各界でご活躍の方やユニークな経営を行っている企業・組織の紹介をしています。

ぎふ清流ボイスのアーカイブ（過去掲載一覧）をご覧いただけます。

2

■情報誌発行

ぎふの魅力をギュッと凝縮！元気なぎふの情報誌

Gifu Project Network 元気 Genki!ぎふ

《編集コンセプト》

①岐阜県の様々な地域資源のＰＲを推し進め、岐阜県の魅力の発信を推進することにより、人や地域・産業、企業等の活力につなげる。

②運営サイト「ぎふ42市町村ネットワーク」と連動し、幅広い人に読んでいただくことにより、地域経済の活性化につなげる。

《PR記事出稿について》

情報誌「Genki!（元気）ぎふ」へのPR記事掲載のご希望の方（企業・団体等）は下記までご連絡下さい。

【本部事務局】Tel：058-237-6222

《概要》

- 創刊号発行：2015（平成27）年5月
- 体裁：Ａ4版　40ページ（前後）　フルカラー
- 発行サイクル：年2回（予定）
- 配布先：岐阜県下42市町村（庁舎）
  県下の図書館をはじめ公共施設
  岐阜県庁、ふれあい福寿会館、県教育委員会
  商工会議所、商工会
  金融機関や医療機関（一部）
  首都圏企業（東京岐阜県人会会員企業）
  記事掲載団体、企業
  他

トップページ Genki!ぎふ 情報誌「Genki!（元気）ぎふ」アーカイブ (archive) から情報誌の既刊号（アーカイブ）をご覧いただけます。

クリック

私たちと共に岐阜県の地域活性化を進めませんか!?

特定非営利活動法人 ぎふ・プロジェクトネットワーク **［法人会員］募集中！**

私たちの活動は、ご賛同をいただいている法人会員からの年会費により支えられています。
岐阜県の地域資源を守り、育てていくことにより地域活性化に貢献を！とお考えの皆さまのご入会をお待ちしております。

【入会のお問い合わせ・お申込み】 本部事務局：Tel：058-237-6222　E-Mail：info@gifu42.net までご連絡下さい。

巻頭企画

古田肇知事が語る 岐阜県の今と未来

古田岐阜県知事インタビュー

岐阜県は観光の基幹産業化に取り組み、知事のトップセールスなどによりその魅力を積極的にPRしています。欧州からの観光客も増えていますが、外国人観光誘客の取組みについて聞かせてください。

本県では、外国人観光客の誘客促進や県産品の販路拡大を目的に、2009年度から「飛騨・美濃じまん海外戦略プロジェクト」を展開し、「観光・食・モノ」に本県の伝統文化などを加えたプロモーションにより「清流の国ぎふ」の魅力を世界に発信しています。

アジアから始めたプロモーションは、ターゲット国を欧米へと拡大してきており、2016年の海外からの宿泊者数は、その5年前と比べて7倍超の101万人になりました。

また、スペイン、イタリア、フランス、ドイツ、イギリスからの旅行者数が軒並み全国上位に入るなど、近隣県と比べて欧州からの旅行者割合が非常に高く、世界各地からバランス良く誘客できているといえます。

「清流の国ぎふ」の魅力を世界に発信

昨年は、新たなターゲットのスペインを含む欧州でトップセールスを行い、これまでの「観光・食・モノ」に、歴史、自然、文化、世界遺産といった地域資源を新たなセールスポイントとして加え、その魅力を様々な角度からPRしました。今年1月にはスペインの旅行博「FITUR(フィトゥール)」にも出展し、継続的にフォローアップしています。

訪れる外国人観光客に向けては、案内表示の多言語化やWi-Fi環境の整備、消費税免税店の拡大といった受入環境の整備を進めています。

また、本県の自然、歴史、文化など、「清流の国ぎふ」の魅力を存分に満喫いただけるよう、ここでしか味わえない体験プログラムを積極的に提案し、滞在時間延長による観光消費拡大も図っていきます。

「岐阜ブランド」の確立

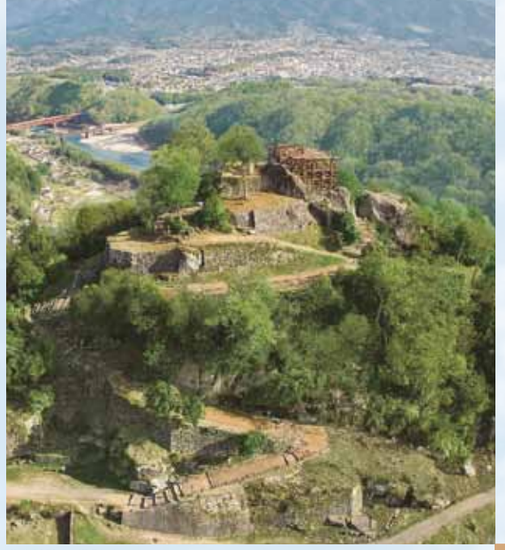
海外への県産品プロモーションの取組みについて教えてください。

刃物や美濃和紙、陶磁器など、本県が誇る地場産品については、2011年度から、その魅力を理解し、継続的な販売に賛同する海外主要都市の小売店を「グローバル・アンテナ・ショップ(GAS)」として構築する取組みを進めています。現在、シンガポール、フランス、スイス、アメリカ、タイの世界5カ国・9店舗と連携していますが、今年3月までにはこれを10店舗まで拡大し、意欲ある県内企業の海外展開を一層後押ししていきます。

また、2015年度からは、世界で活躍するイギリスとスイスの著名デザイナーと県内企業とをマッチングして

美濃金山城跡

岩村城跡



苗木城跡 ※撮影／nextG

海外市場で受け入れられる商品開発を行い、世界最大規模の2つの国際見本市に出展しています。今年1月には2年連続となる「メゾン・エ・オブジェ」(フランス・パリ)に木工、刃物、陶磁器、和紙製品を、また、4月には3年連続となる「ミラノ・サローネ」(イタリア・ミラノ)に美濃焼を中心に出展し、岐阜ブランドの確立と海外への販路拡大・販売促進を図っていきます。

農産物については、海外での飛騨牛のブランド力強化に向け、取扱いレストランや販売店の拡大を図っており、これまでに10カ国・34店舗で「飛騨牛海外推奨店」を認定しました。また、フランス・パリでは、昨年、県産農産物のブランド化を進めることを目的とした覚書をレストラン「ダ・ローザ」と締結するなど、今後は飛騨牛以外にも、富有柿などの農産物の販路拡大を目指していきます。

「岐阜ブランド」を世界にアピールする好機

2年後の2020東京五輪・パラリンピック開催を見据えた「岐阜ブランド」PRの取組みについてお聞かせください。

東京五輪・パラリンピックの開催は、「岐阜ブランド」を世界にアピールする絶好の機会ととらえています。

県産農畜水産物の提供に向けては、GAP(農業生産工程管理)の認証取得と首都圏での食材のPR活動に取り組んでいます。本県では、大会組織委員会の食材調達基準を満たした農産物を提供できるよう、昨年11月に「岐阜県GAP」確認制度を創設しており、その取得を促していきます。

また、「飛騨牛」や「鮎」などの県産食材については、大会で食の提供に携わるケータリング業者やレストラン等にターゲットを絞り、本県産地へお招

関ケ原古戦場「決戦地」

きしたり、首都圏に出向いて試食会を開催するなど、実際に見て、食べていただくことで、その魅力をＰＲしていきます。

県産木材については、大会期間中に各国の選手・役員が集う選手村ビレッジプラザへの提供が決まりました。本県の良質な木材と優れた加工技術を全世界にＰＲする、まさに「ひのき舞台に立つ」思いです。今後も、新国立競技場等の内装材や家具等のほか、ぎふ清流国体等で既に下地材（競技用マットの土台）の利用実績があるレスリング会場等での活用に向け取り組んでいきます。

地場産品については、昨年10月に大会組織委員会を訪問し、賞状の原紙にユネスコ無形文化遺産「本美濃紙」、メダリストの副賞に陶磁器（美濃焼）、ノベルティグッズとして折り紙やしおり等の美濃和紙ブランド認定製品の使用などを提案したところです。

ほかにも、本県が世界に誇る遺産をはじめとした地域の観光資源や、「地歌舞伎」などの文化芸術活動にもさらに磨きをかけるなど、「清流の国ぎふ」の魅力を大いに発信していきます。

国内最大級の航空宇宙専門博物館と「清流長良川の鮎」の魅力を発信する拠点施設がオープン

3月には「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館」が、6月には「清流長良川あゆパーク」が相次いでオープンします。どのような施設になりますか。

岐阜かかみがはら航空宇宙博物館 ※イメージ図

3月24日、いよいよ「岐阜かかみがはら航空宇宙博物館（愛称：空宙博（そらはく））」がオープンします。将来の航空宇宙産業を担う人材の育成を通じて、モノづくり産業全体の振興と地域の活性化を目的とした博物館です。展示面積は国内最大級、国内唯一の航空と宇宙に関する専門博物館となります。

人類最初の動力飛行機「ライトフライヤーⅠ」から日本を代表する最新の探査機「はやぶさ２」まで、人類の航空宇宙への挑戦と技術を俯瞰できるようにするなどして、子どもたちにチャレンジスピリットと感動を与えられる博物館にしたいと思っています。

岐阜かかみがはら航空宇宙博物館 ※イメージ図

また、日本を代表し、世界にも通用するものとなるよう、米国のスミソニアン航空宇宙博物館やＮＡＳＡ（アメリカ航空宇宙局）、ＥＳＡ（欧州宇宙機関）やフランスのル・ブルジェ航空宇宙博物館との連携も進めています。大戦期の三菱重工業製エンジンや所蔵する資料・映像をお借りするなど、魅力ある展示内容や教育プログラムを揃え、その機能充実を図っています。

これらを生かし、多くの社会見学や遠足、修学旅行を受け入れ、子どもたちの航空宇宙産業への興味や関心を育んでいきたいと思います。また、カフェやショップでは、県産食材を使ったメニューの提供や県産品を用いたオリジナルグッズを販売していきます。さらには、他の産業観光施設や周辺企業などを巡るツアールートも紹介するなど、本県のＰＲと国内外からの誘客促進にも取り組んでいきます。

世界農業遺産「清流長良川の鮎」は、認定から2周年を迎えました。昨年5月に現地を視察された国連食糧農業機関（ＦＡＯ）のダ・シルバ事務局長からは、本県が進める国際貢献活動や地域の発展に活かす取組みに対する高い評価をいただきました。

清流長良川あゆパーク ※イメージ図

「清流長良川あゆパーク」は、「清流の国ぎふ」のシンボルともいうべき「清流長良川の鮎」の魅力を国内外へと発信していくための拠点施設であり、鮎をはじめとする地域資源や流域の伝統文化・食文化などを伝え、感じていただけるよう整備を進めています。

鮎の友釣りなど漁業体験プログラムの提供や、臨場感のある映像展示などによる「人と川」、「人と鮎」との関わりの紹介、川の恵みを存分に味わえるレストランメニューも提供していきます。

こうした川や魚などに触れ合う機会の提供を通じて、子どもたちをはじめ多くの皆様に「清流長良川の鮎」の魅力に対する理解を深めていただきたいと思います。

「清流の国ぎふ」づくりの取組みをさらに深化

最後に2018年の県政運営の抱負についてお聞かせください。

これまで積み重ねてきた「清流の国ぎふ」づくりの取組みを着実に進めるとともに、新たな課題にも柔軟に対応していきます。

各産業での深刻な人手不足に対しては、新たに建設業や建築業、林業の分野においても人材確保・育成の支援拠点を立ち上げるほか、外国人が活躍できる環境を整備するなど、あらゆる分野できめ細かく人づくり施策を展開していきます。

また、ソフトピアジャパンを核として産学官で構成する「岐阜県ＩｏＴコンソーシアム（仮称）」の立ち上げや、情報科学芸術大学院大学（ＩＡＭＡＳ）を活用した新商品・サービス創造への支援のほか、各分野でのＩｏＴの活用促進やそのための人材育成など、第４次産業革命の推進による生産性向上を図る取り組みも進めていきます。

東京五輪・パラリンピックの開催をにらんだ魅力づくりと海外戦略にも力を注いでいきます。

スポーツ振興はもとより、県産品等「岐阜ブランド」のＰＲや、世界に誇る遺産や関ケ原古戦場、「ひがしみの」を舞台として4月から始まるＮＨＫの朝ドラ「半分、青い。」をはじめとした、アニメ・映画・ドラマの舞台など豊富な地域資源を活かした国内外からの観光誘客に取り組んでいきます。

また、本県と深い関わりをもつスペイン、モロッコやフランス、リトアニアをはじめとした各国との国際交流を、市町村や民間も組み入れた多層的な地域間交流へと深化させていきます。

県民が安全に安心して、健康で暮らせるよう、引き続き、医療と福祉の連携・充実をはじめ、子どもの貧困対策、障がいのある方の自立・社会参画を支援するとともに、運動習慣の定着や特定健診・がん検診の受診率の向上、食生活の改善策の推進など、県民の自主的な健康づくりにも取り組んでいきます。

また、消防団員の確保や新たな「県防災情報通信システム」による危機管理体制の強化を図るほか、大規模災害に備えたインフラ整備を進めるとともに、リニア中央新幹線や東海環状自動車道西回りルートなどの幹線ネットワークの整備も着実に推進していきます。

東海環状自動車道「養老JCT－養老IC間」開通

Wood Pellet

木質ペレットの現状と未来への可能性

森林の育成過程で生じる間伐材や、製材工場などから発生する樹皮、のこ屑、端材など、
再生可能な資源である木材を取り扱いやすい燃料に加工した木質ペレット。
木質ペレットは木が原料であるため、燃やして二酸化炭素を発生させても、
光合成により再び樹木に取り込まれ、
大気中の二酸化炭素総量の増減には影響を与えません。
また、間伐材や林地残材の有効利用が進めば日本の林業の活性化を促すこともできる、
環境にやさしいバイオマスエネルギーです。
今回は、コーディネーターに岐阜県林政部の玉置雅野さんをお招きし、
木質ペレットの普及・推進に取り組んでいる
豊実精工株式会社社長の今泉由紀雄さん、
南ひだウッド協同組合工場長の倉地伸作さん、
ペレットストーブユーザー代表として高橋忠明さんに参加していただき、
木質ペレットの現状と今後の可能性について語っていただきました。

NPO法人ぎふ
プロジェクトネットワーク
理事長 岸田哲哉

ペレットストーブ
ユーザー代表
高橋忠明さん

南ひだウッド協同組合
ドライウッド工場長
倉地伸作さん

豊実精工株式会社
代表取締役社長
今泉由紀雄さん

岐阜県林政部
県産材流通課技術課長補佐
玉置雅野さん

木質ペレットの取り組み状況

●**玉置**　現在、私は岐阜県林政部にいますが、元々は白川町役場に勤務しており、2年前に派遣されました。白川町は林業のまちであり、木材の有効活用を考えて２００４年にペレット製造機を導入し、同時に公共施設にもペレットストーブを設置しました。最近の機器は改良が進んでそんなことはないのですが、当時設置したペレットストーブの熱効率が悪かったことや、ペレット製造機の性能も低く、作られたペレットの品質もよくなかったことから、木質ペレットに対して住民によい印象を与えることができなかったという苦い思い出があります。

●**今泉**　２００４年というと、14年前になりますね。日本における木質ペレットの製造はいつごろからスタートしたのですか？

●**玉置**　日本で初めて木質ペレットの製造が行われたのは第二次オイルショック後の１９８２年です。現在もさかんに製造を続けている岩手県のペレット製造工場などが作られ、国産のペレットストーブが誕生しました。１９８５年にはペレット製造工場数も26まで増えましたが、その後は、中東からの原油供給が安定し、原油価格が下落すると、工場数も生産量も減少していきました。これが第一次ペレットブームと言われています。しかし、２００２年のバイオマスニッポン閣議決定後から工場の建設が再び始まり、工場数が増加しました。２００１年に稼働していたのは3工場で年間生産量が2,３００トンに過ぎなかったのが、昨年 10月時点で１４２工場、年間生産量12万トンにまで増えました。この間のペレット製造やその利用の伸びが常に順風満帆だったとは言えないのですが、第二次ペレットブームと呼ばれています。

●**今泉**　再び国内のペレットの製造が盛んになる中、岐阜県においてはどのように製造や利用が拡大したのですか？また、ペレットの普及において最近、課題になっていることはありますか。

●**玉置**　岐阜県においては、２００８～２００９年にかけて、今日出席いただいている下呂市の南ひだウッド協同組合、高山市や揖斐川町の規模の大きなペレット製造工場が稼働を始めました。ペレットストーブを設置する家庭や事業所が増えたのはもちろん、この情報誌「Genki! ぎふ」の創刊号（２０１５年5月発行）で紹介したように、規模の大きい福祉施設や病院などの冷暖房や温水供給を行うペレット焚吸収冷温水機が各所に設置されました。しかし、再生可能エネルギーの固定価格買取制度が２０１２年７月にスタートして以降、ペレットの原材料となる製材端材や林地残材の需要が一挙に高まり、調達が容易でなくなったり、価格が高騰したりしてペレット製造業者が困っているという話をよく耳にするようになりました。

少子高齢化が進む岐阜県の森林

●**今泉**　それは私も感じています。当社が運営している住宅・インテリア・カフェの複合施設である「ＢＨＭＳ」では、倉地さんのところで作っていただいたペレットを10kg５８０円で販売していますが、消費者からは「高い」という声が聞かれます。でも、現在は材料になる木材価格が非常に高騰しています。ＦＩＴの影響で、発電に回される木材が増えてしまって、木質ペレットの材料として調達が難しくなっています。当社としてはストーブを販売している以上、燃料になるペレットを供給するのはお客様に対する当然の使命と考えて、ペレットを販売していますが、正直ペレットの販売は利益がほとんど出ないのが現状です。

●**玉置**　今泉さんからペレットの原料となる木材の価格が高騰していて、経営を圧迫しているというお話がありました。少し岐阜県の木材利用についてご紹介したいと思います。岐阜県は全国２位の県土面積82％が森林という「木の国 山の国」です。森林面積も全国５位で、森林の蓄積も全国第５位で、森林資源がとても豊かです。しかし、その森林資源が十分に活かしきれていないという現状があります。

　現在、森林の少子高齢化が進んでいます。戦後植樹して今すぐに利用できる木材がたくさんあるわけですが、残念ながら材価の問題や搬出コストがかかるなどの理由により利用が進んでいません。このままの状態が続くと、１００年後は、１００年生以上の森林が9割になってしまいます。樹齢１００年以上の木がたくさんあるのだから、立派な森ができると思うかもしれませんが、木も森も育ちすぎてしまうと、二酸化炭素の吸収率が落ちて、さらに、樹木が育つ量より高齢になった樹木が朽ちていく量のほうが多くなると、二酸化炭素を排出するようになります。また、風や雪によって倒木が発生するなど気象害も発生しやすくなります。森林を若返らさなければ公益的機能が果たせなくなって、持続的利用ができなくなります。

●**今泉**　森も育ちすぎてしまっては、逆に二酸化炭素を排出するようになるのですね。

●**玉置**　はい。大事なのは、適切な伐採と再造林で、森の年齢を平準化することです。木は太くなりすぎると柱として使いにくくなります。大きくなると材価があがるかというとそんなことはありません。現在では、杉は太くなりすぎて、柱でなく、梁や桁用としての利用が増えています。森林の成長に追いつくほど利用できていないという実態があるのです。木材は大きく4つに分類されます。経済的価値が高いA材、主に合板用に加工されるB材、製紙用チップなどに用いられるC材、燃料用として使用されるD材です。ＦＩＴによるバイオマス発電が注目を集める中で、B材やC材までがバイオマス発電用になっているという話もあるようです。非常にもったいない使われ方がされているのが課題といえます。木材を発電に利用すると木の持つエネルギーの2～3割ほどしか活かすことができません。それに対してペレットのように燃やして熱利用すれば木の持つポテンシャルの9割を活かすことができます。熱利用のほうが効率的なので、その分二酸化炭素削減効果も高いのです。

木質燃料の素晴らしさを活かしたい

●**倉地**　岐阜県のペレット生産は全国でどのぐらいに位置するのでしょうか？

●**玉置**　２０１５年の調査で全国５位です。２０１６年の調査では、全国に１４８の製造工場があり、県内には7工場があります。しかし県外には、冬眠状態の工場が多いのが実情です。生産性の低い施設が多いため、国産ペレットの価格が高くて、外国からペレットを輸入するという残念な状況になっています。そんな中で、南ひだウッド協同組合は、全国で5つしかないＪＰＡペレット認定工場の1つです。これまでのペレット製造の歴史を教えてもらえますか？

●**倉地**　製材所と建築会社の会員企業で構成されている協同組合で、１９９５年に建築材の乾燥を目的として組合が発足しました。ペレットの製造に関しては、２００９年からスタートしました。地元の温泉施設のボイラーとストーブを主な供給先として年間約６００トンで生産を開始しました。ただ、当初は1日無事に生産が完了できる日の方が少ないぐらいで、トラブルが多かったです。3年が経過したところで、機械の主軸が破損して、これ以上はメンテナンスをしても持続は難しいということで、リングダイの中古機械を購入しました。3年前から生産も軌道に乗ってきて、現在は当初計画の倍である年間１，２００トンの生産になっています。

●**玉置**　２００９年からペレット生産を開始したということですが、きっかけは何だったのですか？

●**倉地**　組合が発足してしばらくは木材を乾燥させるとき、化石燃料を使用していました。燃料が高騰したこともあって、２００４年に木くず焚きボイラーを導入したところ、重油の大幅な削減に成功することができました。それまでも、プレナーくずや木くずをゴミとして燃やしていて、もったいないという思いを持っていました。木質燃料の素晴らしさを活かす方法はないかと考えて、ペレット生産を開始することになりました。

安全性が高い岐阜県産材１００％ペレット

●**今泉**　倉地さんのところで作っているペレットを当社で扱っているのですが、大変品質がよいです。材料など特徴はあるのですか？

●**倉地**　平成29年に、日本木質ペレット協会の品質認定を受け、今シーズンから認証ペレットとして販売を開始しています。原材料は岐阜県産の杉と桧の幹だけを使った１００％岐阜県産材のホワイトペレットです。樹皮を含んでいませんので、燃焼灰も少なく熱量も高いのが特徴です。杉と桧だけを利用していますから、「嫌な匂いが一切ありません。逆に天然素材ならではの癒しが感じられます」という声も寄せられて、好評をいただいています。

●**玉置**　材料はどこから調達しているのですか？

●**倉地**　自社工場だけでは足らないので郡上市の製材工場などいくつかの事業所と契約しています。基本的にはプレナーくずやおが粉が原料で、含水率も非常に低いです。

●**玉置**　それは理想的ですね。いくら木材が確保できても丸太のままでは破砕したり乾燥したりするのに大きなエネルギーが必要とされます。そのために化石燃料を使用するとなれば、木材の有効利用とは言いにくいです。

●**倉地**　放射能汚染の検査も実施済みで、岐阜県の木は安全性も高いです。消費者の皆さんにも安心して使っていただくことができる製品であることも特長の1つだと思います。ただ、課題もあります。おが粉やプレナーくずを扱うので、やはり粉じんの発生には苦慮しています。間仕切りを設置するなど毎年改良を続けて、当初と比べると改善されてきましたが、今後さらに環境面の整備にも力を入れていきたいです。

●**今泉**　ＢＨＭＳでペレットを販売していますから県外のペレット生産事業所から、「うちの製品を販売してもらえないですか」という依頼があります。それで調べてみたところ、セシウムが多すぎてとても扱えない製品だったことがあります。その点、倉地さんのところの製品は認証を受けているから安全性が高いです。不純物が混合しているペレットを使用すると、ストーブの故障につながる危険性もありますから、認証を取得されたことで、今後の需要も伸びていくのではないでしょうか。

●**倉地**　ただ、それに関しても課題はあります。スペース的な問題として、ストックする場所が限られています。倉庫を借りてまで増産しようとすると、ペレットの価格が上がってしまいます。その点は一つの課題です。

市街地でも炎を見ながら暮らしたい

●**今泉**　燃料に対する補助制度はないのですか?

●**玉置**　燃料に対してではありませんが、一般家庭のストーブとボイラーに対する補助は高山市、中津川市、郡上市、白川町、揖斐川町、白川村が実施しています。

●**高橋**　私は岐阜市内に住んでいて、ペレットストーブを愛用しているわけですが、自宅がある場所は住宅密集地です。設置する際、一番心配したのはやはり火災です。街中に暮らして炎が見える贅沢な暮らしがしたい。ただ、絶対条件として煙を出さないこと。それを実現できるのはペレットストーブだけでした。最初にほんの少し煙が出るだけで、完全燃焼すれば煙は一切出ません。燃料に対する補助の話がありましたが、ユーザーの立場からすると、やっぱり燃料はもう少し安くなるとありがたいです。街中で炎を見ながら暮らすという贅沢な暮らしですから、多少費用がかかることは仕方ないと考えています。それでも初期費用もコストがかかっていますから、ランニングコストぐらいはもう少し下がるとありがたいというのが正直な実感です。

●**今泉**　ペレット全体に対する補助制度に関しては、市町村や県のレベルでなく、国の単位で取り組んでもらわないと難しいと感じています。ヨーロッパでは、国が思い切った補助制度を導入して、普及が進みました。倉地さんのところも年間1,200トンというと多いように感じるかもしれませんが、採算面では相当厳しいと思います。自前の事業所を所有しているから何とかやれているのだと思います。当社もおかげさまで主力の半導体や液晶、ロボット関係の事業が忙しく、今後国内向けの製品を開発したいという思いからペレットストーブの開発をスタートしていますが、ストーブ単体では赤字です。それでも開発に対する投資も行っています。ただ、いつまでも赤字では続きません。モチベーションも低下していきます。国も木質ペレットに関して本気で取り組む姿勢をぜひ見せてほしいと思っています。そうでないと、市場はなかなか伸びていかないと思います。

●**玉置**　確かにペレットストーブに関しては、まだまだ知名度が低いです。「これは何ですか?」とよく言われます。県の補助制度に関していえば、以前は公共施設に設置する場合に限っていましたが、現在は多くの県民が利用する商業施設など、例えば住宅展示場にペレットストーブを設置したときも補助制度を活用できるようになっています。これによって、これから住宅を建てようという方にも関心を持ってもらうことができます。ペレットのPRをさらに進める意味で、有効に補助金が使われている例といえます。

●**岸田**　当NPO法人で、県内の6市を対象にペレット調査を実施したことがあります。アンケートの結果からは、「詳しくは知らない」という声も聞かれました。ただ、知らないと答えた自治体からも、「木質ペレットに接する機会がないので知識がないが、仕組みを理解したい」という前向きな回答が寄せられました。これもいい機会ですから、勉強会などを開催して、木質ペレット認知のきっかけに取り組んでいただきたいと思います。

●**玉置**　エンドユーザーからの声の一つとして、「毎日掃除をするのが面倒だ」いう声もあります。

●**高橋**　そんな声もあるんですね。確かに手間と言えば手間ですが、灰はほんの少し出るだけです。うちでは庭の畑やプランターに撒いて終わりです。ペレットストーブは地震でも安全です。豊実さんのストーブは揺れが起きたら自動的に止まります。昔の薪ストーブのイメージで地震が起きたら危ない、延焼するのではないかと思っている方も多いと思います。そういう間違った認識を持っている方が、まだまだ多いと思います。

●**玉置**　冒頭で岐阜県は森林県だという話をしました。現在、岐阜県の年間森林伐採量は約100万㎥です。ただ、利用されているのは約39万㎥で残りは山の中で眠っています。未利用材の活用をなんとか高めたいと取り組んでいます。木材需給のミスマッチが起きています。必要とされる場所に必要とされる木材が供給されず、バランスのいい利用形態が崩れています。全国にペレット製造工場は148カ所ありますが、総じて稼働率が低く、全国平均で稼働率は20%以下です。ペレットをもっと使いやすくするしくみが必要です。環境価値を訴えるだけでは木質ペレットの普及はなかなか進みません。木を使うファンを増やし、木を愛する次世代を育てることも大切だと思います。木質バイオマスエネルギーの地産地消に取り組み、身近な山や森を守っていこうと考える民間事業者さんの思いやユーザーさんの思いを受け止め、今後の施策に活かしていきたいと思います。本日はありがとうございました。

ペレットの魅力を知ってほしい

●**今泉**　ペレットストーブは国内で年間約2,500台の販売です。薪ストーブはその4倍の市場規模です。ペレットストーブの魅力をもっと知ってもらうことも大きな課題ですね。

●**高橋**　木質ペレットが増えることは森林資源を守ることに確実につながります。木を燃やすのは罪だという考えがあるように思います。その発想から、ペレットストーブはぜいたく品で環境を壊していると、間違った理解をしている人もいるように思います。

木を愛する次世代を育てる

●**高橋**　県全体、あるいは国レベルで一律の補助があると、ストーブを購入する際も一歩踏み切ることができると思います。ぜひ消費者の背中を押す施策を考えてもらいたいです。自動車や住宅にエコ減税があります。ストーブも設置したら永久的に使用するものです。減税があってもいいように思います。

定価格買取制度の影響でペレットの原料価格が高騰し、販売価格も上昇し続けると、燃料費の問題は切実なものになりますね。

ペレットストーブを選んだ理由は安全性

●**高橋**　一般消費者に対するPRが不足していると思います。ペレットストーブは着火と消火が早くて、安全性が非常に高いです。これは消費者としてはありがたいことです。24帖のリビングの片隅に設置しているのですが、部屋全体がほわっとした暖かさで包まれます。石油ストーブの臭さもないし、エアコンよりもはるかにいいと思っています。県内でもストーブの導入に対する補助は中山間地の5市町村とのことでしたが、むしろ市街地に暮らす人の方が、需要が大きいと思います。

●**今泉**　当社がターゲットにしているのも、まさにそこです。ストーブは設置すると1年中同じ場所にあります。薪ストーブに近い雰囲気が狙いでしたので、板金ではやはり寂しい。外観デザインで部屋の雰囲気も大きく変わりますから鋳物にしました。ストーブもインテリアの一部だと思っています。海外の先進国では、燃料に対する補助制度もあります。ぜひ、その点は今後考えていただきたいです。

●**玉置**　燃料費に対する公的補助は、北海道の市町村で行っている例はいくらかあるようですが、県内では行っておりません。灯油価格が高騰していれば燃料費の面でもペレットに優位性があると言われてきましたが、再生可能エネルギーの固

●お問い合わせ

豊実精工株式会社

〒501-3303　岐阜県加茂郡富加町羽生2146-2
TEL:0574-55-0180　FAX:0574-55-0185
http://www.hojitsu.co.jp/

ペレットストーブ事業部
TEL:0574-55-0186　FAX:0574-54-1463
http://pellestar.jp/

南ひだウッド協同組合

〒509-2506　岐阜県下呂市萩原町羽根503-6
TEL:0576-52-4720　FAX:0576-52-4721
http://www.nukumori-pellet.com/
E-mail:mhw-dry@ivy.ocn.ne.jp

「金田一少年の事件簿」
「TRICK」などの
ヒット作品を送り出してきた
演出家・映画監督の堤 幸彦さん。
三重県四日市市に生まれ、
名古屋出身ということもあり、
ここ数年は、映像のチカラで
地域を盛り上げる活動にも
積極的に取り組んでいます。
堤さんの地域にかける思いを
語っていただきました。

映像のチカラで地域を応援する

演出家・映画監督 堤 幸彦

映像による東海地区の活性化プロジェクト

映像による東海地区の活性化プロジェクト「東海アクションプロジェクト」で、かなり活発な活動を展開しています。きっかけはどのようなものだったのですか？

堤　4年ほど前になるでしょうか。愛知工業大学で客員教授を務めていた時、地域振興について講座を行いました。その時、様々な大学の先生と知り合い、頑張って地域を元気にしようと努力されている先生がたくさんいることを知りました。先生方の話を聞いているうちに、「これは1つのグループにすれば、何かできるのではないか」と思いました。在名のテレビ局や広告代理店、大学の先生、そして私たちがメンバーになり、東海アクションプロジェクトとしてスタートしました。

同時期には、愛知県内を中心に市民ムービーも作られたようですね。

堤　はい。これは高浜市から依頼を受けたものですが、市民ムービー「タカハマ物語」を制作しました。若干はプロの手も借りましたが、撮影に関しても基本的には高浜市民の皆さんが参加して作ったものです。やる気のある中学生から高齢者まで、ちょっとした劇団のような形にして、半年以上かけて撮影しました。できあがってみると、やらされている感がまったくなくて、素晴らしい作品になりました。高浜市では、そのムーブメントが今も脈々と続いていて、2作目を作り、映像塾のような形で子どもたちの教育の一環になっているということを聞いて、つくづくやってよかったと思っています。映像による市民自主映画も東海アクションプロジェクトの1つの柱になっています。

地域とどう向き合うか

サトウタリレーという事業もありますね。

堤　はい。ネット上で曲だけ提供するので、歌詞や映像はそれぞれのまちで作っていただく「サトウタリレー」というプロジェクトですが、こちらもすでに10以上の都市が参加しています。

東海テレビで放映されたドキュメント映像も、その一環ですね。

堤　はい。夕方放映している「みんなのニュースOne」という番組内で3ヶ月に1度ぐらいのペースでドキュメント映像を発信しています。2014年に日本創生会議が消滅可能性都市を発表しました。全国で900近い市町村が放っておくと、人口減少どころか、まち、むらが消えていくというものです。愛知県はそれほどでもないですが、岐阜県は結構、数が多いです。寂しくなっていく日本の指標の1つなのでしょうが、消滅可能性都市と言われた地域に住む人はどう思うのか。もう少し希望のあるものとして表現することができないかと考えて、そうした地域に住む15歳の子どもたちに取材を続けています。

三重県鳥羽市神島という漁村に住む漁師の息子さんは、料理人になりたいという希望をもって伊勢市の高校に行きました。愛知県豊根村の子は、豊橋市の有名高校に合格し、将来は国立大学に行って、戻ってきて、まち・むらを再生する仕事につきたいという明確な希望を持っています。岐阜県中津川市で自然を愛している子にも取材をしました。ただ、1度きりの取材だけでは、人口減少に対する私なりのアクションになりません。伊勢市の高校へ行った後はどうなったのか、大学卒業後はどうしているのか、中津川市にはリニアが来たけれど、どう変わったのかなど10年間追い続けて、地域とどう向き合うかという視点で描くことができたらと考えています。

自分の培養液だったまちに恩返しがしたい

近年は、東海地方を中心に地域での活動が活発なわけですが、以前から地域に目を向ける意識は強かったのですか？

堤　大学を中退して、放送専門学校に入り、東京の放送業界の中で生き残るだけで必死でした。地域に目を向けることは、頭の中にはありましたが、正直そんな余裕はありませんでした。出身地ですから地元から依頼されて制作をしたこともありますが、地元に根差すという意識はありませんでした。

ターニングポイントになったのは東日本大震災前後です。ちょうど、名古屋で「MY HOUSE」というホームレスの映画を作っていました。まちの富のようなものを上手に利用される、頭のいいホームレスの方が東京にいて、その方と河原のハウスの中で話して、生きるコツを伝授してもらって名古屋で映画化しました。そして震災に見舞われました。非常にむなしいです。積み上げてきたものが一瞬にして崩壊し、家族や仲間を失ってしまいます。四日市市で生まれ、育ったのは名古屋です。この地域には知り合いも無数にいます。自分の培養液だったまちに対して、きちんと恩返しをすることが必要ではないかと思ったのが50歳の初め頃でした。それ以来、自分でできることからコツコツ始めています。

岐阜県の気になる場所

先ほど、市民映画というお話がありました。岐阜県内で市民映画の制作はされていますか？

堤　残念ながら岐阜県内では実現していないですが、今後いろいろと考えていきたいと思っています。岐阜は非常に好きな場所であり、気になる場所もたくさんあります。

例えば、岐阜市の繊維問屋街。1970年代にはイヴ・サンローランも訪れて、産業的に爆発的に拡大したにもかかわらず、今は非常に寂しく産業遺産のようになっています。あれだけ一世を風靡した繊維産業はどうなっていくのか。また、かつてデパートが4つありました。近鉄が撤退し、パルコもなくなりました。名古屋という大都市圏に近いという理由はあるのでしょうが、濃尾平野の北端にあって、県庁所在地であり長良川も含めて観光資源もたくさんあります。もう少し盛り上がってもいいのではないかという一抹の寂しさが気になっています。

もう1つは、白川町です。岐阜県には白川という名がつくまちが2つあります。もう1つの白川村は世界遺産になり、昇竜道プロジェクトでも名前が出てきます。一方で白川町はどうなっているのかということです。人口が減少していくことは、単純に田舎というだけでは分析しきれないと思います。住んでいて不便である、将来に対する希望のなさ、もっといってしまえば、そこに住んでいる子どもたちのアイデンティティがなくなっている状態なのであれば、何かできることはないだろうかということを探したいと思っています。自分なりの興味をターゲットとして、何か映像を作ることができたらと考えています。

地域を元気にするためにアクションし続ける

東海アクションプロジェクトとは別に、「堤東海ゼミナール」という活動もされていますね。

堤　はい。先ほど消滅可能性都市という話をしましたが、大学こそ消滅の危機にあります。今後、子どもが大胆に減っていきます。各大学はいろいろなアイデアを出して学生をつなぎ留めるのに必死です。世界大学ランキングで、東京大学ですら順位が決して高くないという現実において、東海地方に点在する私立大学の危機感は大変なものがあります。

大学に元気があって楽しくないと学生は来ない。その原則を忘れてはいけないと思っています。私が大学に行ったのは1974年です。大学闘争で荒れた70年代初頭が終わり、モラトリアムしている4年間は楽しそうだという幻想がありました。入試倍率の高い大学もたくさんあって、それをクリアすると、毎日のようにイベントがあって、サークルも楽しくて、活性化していました。それを現代に蘇らせることができないかと考えました。

大学という枠の中では実現が難しいですが、ゼミという形式ならいいだろうと考えました。女子大生に集まってもらって、いろいろなモノやコトにふれさせて、それをネットやイベントとして発信し、「学生は面白そうだ。大学も楽しそうなところだ」という印象を伝えられればいいと思っています。

名古屋はどのようにして生まれたかをまじめに追求する企画はおもしろかったです。私の撮影現場に来てもらって、エキストラ体験もしてもらいました。普段ではなかなか体験することのできないことにチャレンジさせようと考えています。

スーパーカミオカンデも連れていきたいです。伊勢神宮もいいですね。今は少し違っていますが、伊勢神宮は施設内ですべてが完結している究極のエコサイクルでした。バックヤードの巨大な森から木を切って、神社の材料にします。水も自然に沸いてきます。最大の要因は塩田があったというのです。単にパワースポットとして見るのではなく、物理的なエコサイクルを見に行くのはどうか。アイデアは無限に出てきます。大学生のそうした体験が世間に発信されて、大学生は楽しそうだというイメージづけをすることが、過当競争にさらされるであろう私立大学の援護射撃にならないかという思いでスタートしています。これからも、未来に向かって希望が持てる地域であり続けるために、様々な活動を展開して応援していきたいと思います。

TOKAI ACTION PROJECT

問い合わせ
東海アクションプロジェクト事務局
〒460-0002
名古屋市中区丸の内3-13-7 OIKOS 1F
株式会社カミングスーン内
TEL:052-962-3242
FAX:052-962-3243
https://tokaiaction.jp/

キラリ
アクティブ
watching

日英仏のトライリンガルとして国際舞台で大活躍

バイリンガルフリーアナウンサー・
ミセスグローブ2017日本代表

野口美穂さん

「およそ300m先、左方向です」。馴染みのある方も多いGoogleマップの音声ガイダンスを担当し、バイリンガルフリーアナウンサー・司会・通訳・ナレーターとして活躍するのが揖斐郡池田町在住の野口美穂さん。昨年は日本一のミセスを決める「ミセスクイーンコンテスト」で見事に優勝。ミセスグローブ日本代表として世界大会にも出場するなど多方面で活躍しています。

Googleマップから聞こえてくる馴染みのあるナビ声

――Googleマップの音声担当ということで、ネット上で大きな話題を集めたようですね。

野口　はい。5年ほど前、自宅でナレーションを収録して海外の制作会社に納品する仕事のひとつとして請け負ったものです。ただ、最終的にどこで使用されているかは知らされていませんでした。3年ほど前でしょうか。Googleマップを初めて使って、「なんか聞き覚えがある声!?」と思ったら、それが実は私の声だったのです。そのGoogleマップの音声が一昨年夏、機械的な合成音声に変わりました。それがあまり好評ではなかったようで、ツイッターで「前の声の方がいい」というツイートが多く寄せられて、元の私の声に戻ったという話題がメディアにも取り上げられました。

どのように人から見られているのか

――そうだったんですね。ほかにもG7伊勢志摩サミット、カンヌ国際映画祭、企業イベント、国際結婚披露宴で司会を務めるなど幅広い分野でご活躍です。昨年は、ミセスグローブ世界大会にも出場されました。

野口　はい。ミセスグローブの国内予選大会であるミセスクイーンコンテストに出場してみたらどうかと、先輩に勧められたのがきっかけでした。普段、司会としてステージに立って仕事をしていますが、自分が主役になることはありません。どのように人に見られているか、言葉以外でどんな印象を持ってもらえるのか、いい勉強の機会になると思って出場することにしました。

――そして結果は見事優勝に輝き、ミセスグローブ日本代表になったというわけですね。

野口　はい。国内のコンテストでは、浴衣を着て踊った後、1分間のPRタイム、その後イブニングドレスを着てウォーキングという審査内容でした。PRタイムでは、皆さんはスピーチをしたり、ダンスをしたり、特技を披露しましたが、こういう場では笑いがあまりないのではないかと思って、ブルゾンちえみさんの真似をしたところ、結構笑ってもらえました。主役として、自分の発言や見せ方が注目される経験は、今までとは違った感覚でしたが、今後の活動にも活かせる、よい学びの場になったと思います。

ラジオから流れてくる洋楽の歌詞を理解したい

――英語、フランス語を操るトライリンガルとして多方面で活躍されていますが、外国語に興味を持つきっかけは何だったのですか?

野口　英語に興味を持ち始めたのは小学5年生ぐらいからですから、最近の子どもたちに比べるとずっと遅いです。音楽が好きで、ラジオから流れてくる洋楽の歌詞を知りたいと思ったのがきっかけです。高校2年の夏から1年間アメリカ・メリーランド州に留学して、その頃から英語に関わる仕事ができたらいいなと考えるようになりました。

――英語が堪能になると、目指すところは通訳が思い浮かびます。司会業へのアプローチは何がきっかけになったのですか?

野口　20代の頃は、会議通訳者を目指して、様々な仕事をしながら勉強を続けました。でも、私より英語が流ちょうな人はたくさんいます。英語以前に日本語の表現力が足りないと思い、アナウンス教室に通い始め、司会業に興味を持つようになりました。また、学生時代スピーチコンテストに出場したり、英語で演劇したりしたこともあって、人前で表現することが好きでした。司会と通訳をミックスすることで、新しい需要があるのではないかと考えました。

文化もしっかり学んでほしい

――話題が変わりますが、英語が苦手で悩んでいる人は多いと思います。英語が得意になる秘訣はありますか?

野口　聞いた音を自分の口から発声することが大事です。録音して、周りの人に聞いてもらうのもいいでしょう。能動的な発信が必要だと思います。1曲の歌をネイティブの発音で歌えるようにする、映画の名言を完全にマスターする。一つのことに集中すれば、いつかは完成できます。その積み重ねで上達すると思います。留学という方法もありますが、外国の方と話すということは、いわば試合に出るようなものです。それに、外国の方と話す場合でも、言葉だけでなくゼスチャーで意味が通じてしまう場合もあります。やはり、試合の前には練習が必要です。

――小学校では英語教育が本格導入されるなど、国も国際化に向けた取り組みに力を入れていますね。

野口　はい。いずれ英語は特技ではなく、話すことができて当たり前という時代になるでしょう。ただ、昨年テレビのバラエティ番組で黒塗りをして笑いを誘ったことが黒人差別ではないかとツイッターでも話題になりました。笑いのネタで日本人としては悪気がないのでしょうが、アメリカなら大問題になります。外国語学習では言葉も大事ですが、文化もしっかり教える必要があると思います。教育界では英語に対してかなり過熱していますが、文化の面が切り離されている感じがします。そうした部分もしっかり学んでもらって、多くの子どもたちに、真の国際感覚を身につけてもらいたいと思います。

2月15日・16日・17日の3日間、
岐阜メモリアルセンターので愛ドーム、
ふれ愛ドームをメイン会場に、
日本商工会議所青年部第37回全国大会
「岐阜かかみがはら大会」が開催されました。
全国から会員が集まる大事業を
運営する立場での苦労や、
そこで得たもの、今後の展望などについて、
岐阜県商工会議所青年部連合会会長の
田代義文さんと
次年度会長の亀谷孝太さんに伺ってみました。

全国大会を契機に交流の輪をさらに広げる

岐阜県商工会議所
青年部連合会

平成29年度
岐阜県商工会議所
青年部連合会会長
田代義文さん

平成30年度会長
亀谷孝太さん

距離の遠い近いは関係ない想いで人が動くことを実感

全国の青年部会員が岐阜に会する一大事業だったわけですが、どんな苦労がありましたか？

田代 本番に向けた準備は大変でしたが、それよりも得たものの方が大きかったです。これまでは、各市の青年部単独での動きが多かったわけですが、今回の事業は岐阜県の青年部が一つになって大きな組織として動きました。市の青年部を越えた会員同士の結びつきがとても強くなったと感じました。

亀谷 私も同じ思いですが、もう一ついえば、全国の方とつながりを持つことができました。今回の全国大会に来てもらうため、キャラバンを組んで全国を回ってPR形でしたわけですが、私自身、交流の輪がとても広がりましたし、ほかの会員もすごく広がったと感じている方が多いと思います。

例年、全国大会は約5,000人の規模で開催されています。今回は岐阜県に約6,100人の方に来ていただきました。やはり遠方になるほど、参加する人数も減っていくのでしょうか？

田代 今回、キャラバンでは春と秋に分けて、全国約30カ所を回りました。感想としては、遠いから行かないという感覚はなかったように思います。キャラバンで訪問して、「ぜひ来てください」と思いを伝えて、「君がいるから、ぜひ参加させてもらいます」という言葉をいただくことも何度かあって、それはとてもうれしかったですね。そして実際に来てもらって、「やあやあ」「本当によく来てくれました」ということで、さらに交流が深まりました。今後にもつながっていくと思います。

亀谷 今回の特徴としては、分科会を通常より強調してPRした部分がありました。過去の全国大会では、定員に満たない場合は中止する分科会もありましたが、うちとしては、分科会に力を入れている分、定員まで人数を集めたいという思いが強かったです。その分、キャラバンにもより一層力が入ったかもしれません。せっかく岐阜へ来てもらったからには、地域の魅力を全国の人に伝えたい、岐阜のことをもっと知ってもらいたいという思いは会員全員が共通認識として持っていたように思います。

失敗してもフォローしてくれる仲間がいる

少し個人的な話題に変わりますが、青年部の活動を通じて、ご自身にどのような変化を感じていますか？

田代 直接、仕事につながるわけではありませんが、人脈が大きく広がります。いろいろと気づかされる部分も多いですね。特にこの全国大会では、エリアが異なる同業者と話す機会もたくさんありました。地元では、仲間だけどライバルという一面もありますから、どうしても込み入った話はしにくいです。その点、エリアが違えば心の内を素直に話すこともできて、とても勉強になりました。今後は、それをどう社業に活かしていけるかを考えたいと思っています。

亀谷 私は青年部に入って、いろいろなきっかけをいただいたと思っています。青年部に入るまでは、正直、人前で話すのも苦手でした。仕事だけでは決して学ぶことができなかったことも、たくさん学ぶことができて、自分自身も成長を感じています。失敗してもフォローしてもらえる場がありますから、思い切って飛び込みさえすれば、様々なことがつかめると強く感じています。

自らが成長することで周りが変わる

話が少し前後しますが、青年部に入るきっかけについて教えてください。

田代 父が商工会議所に入っているので、存在としては身近なものでした。きっかけは友達と先輩の誘いですね。ただ、入ったころは、私も若くて、正直そんなに活動したいとは思いませんでした（苦笑）。夏祭りの運営が大きな事業なのですが、若いから祭りに行く方が楽しいです。「裏方をやるのか、楽しめないなぁ」というのが本音でした（笑）。ただ、歳を重ねていくにつれて、市民の方々が楽しんでいる姿を見るのが、自分の楽しみに変わっていきました。

亀谷 私は青年部の活動内容がどんなものかわからないまま、先輩のトップダウンで加入しました。最初は少し苦しかったですね。ただ、先輩方に少しずつ負荷をかけてもらって、役職を与えてもらうと達成感が得られるようになってきます。少しずつ段階が上って、自分がやりたいと思うことを企画して、実行して、できたという達成感が得られると、どんどん楽しくなります。そんな自分を見ていただいて、「今度、こんなことを一緒にやらないか」と声をかけてもらえるようになって、意識もどんどん変わっていったように思います。

田代 自分を成長させてくれる社会勉強の場だと思っています。自ら学びに向かうというのは、強い意志がないとなかなかできないことです。その意味では、大変よい経験をさせてもらっています。

亀谷 商工会議所の青年部なので、加入さえすれば仕事につながるだろうと思う人もいるかもしれません。でも、それは逆です。青年部活動を通して自分を知ってもらう。そして信頼してもらえれば、おのずと仕事にもつながってくると思います。途中から、そのことに気づきました。

つながりをより深める1年に

最後になりますが、来年度の青年部の活動の目標を聞かせてください。

亀谷 ここ数年は、今回行われた全国大会に向けた準備に全精力を注いでいました。これで一区切りつきましたので、4月からは、いったん元の活動に戻したうえで、さらに広がっていけるようにしたいと考えています。今年は、全国大会というきっかけがあったので、全国の人とつながることができましたが、来年度、新しく青年部に入る人にとっては、そのつながりがありません。今回の経験を活かして、これから入る新しい仲間たちを導くような形を作りながら、活動を広げていくことができたらと考えています。今回の全国大会を通じて、全国がとても近くなったと感じました。大変かもしれないけど、それ以上に得るものがあるということを、次の人たちに伝えたいと思います。新たな交流の輪をさらに広げる1年にしていきたいです。

JCI™

明るい豊かな社会の実現に向け、青年経済人が集い活動する公益社団法人日本青年会議所（日本JC）。社会の若きリーダーとして、今年度どのような活動を展開するのか、東海地区岐阜ブロック協議会2018年度会長の酒井健吉さんに伺ってみました。

公益社団法人 日本青年会議所

17の「和」の精神性が導く 愛と希望溢れる岐阜の創造

地域間交流をテーマに開催される「JCカップ岐阜大会」

――日本JCは、1月1日から12月31日までが1年度ということで、まだ準備段階の事業も多いと思いますが、今後予定されている事業について教えてください。

◆酒井　昨年実施した「全国一斉！国民討議会」「JCカップ岐阜大会」「ぎふブロック大会」に関しては、今年度も引き続き実施する予定です。今年度の岐阜ブロック協議会のスローガンは「17の和の精神性が導く　愛と希望溢れる岐阜の創造」に決まりました。そのスローガンに基づいて、各事業の内容をさらに深めて実施していきたいと考えています。

――U－11少年少女サッカー大会の「JCカップ岐阜大会」は今年で4年目を迎えるそうですが、事業内容もさらに深まりを見せそうですね。

◆酒井　はい。地域間交流を目的にしたJCカップですが、初年度は周知が徹底していないこともあって、なかなか参加チームが見つかりませんでした。当時、私は設営担当だったこともあって、地元である土岐市のチームに声がけをして参加してもらいました。岐阜大会は1チームのみの参加だったため、自動的に東海大会へ出場することになったわけですが、そこでは大差で負けてしまいました。来年の参加は見送られるかもしれないと思っていたのですが、チームの監督さんから、「今年もぜひ出場させてください。同年代に大差で負けたことがバネになって、子どもたちの顔つきが変わりました。一生懸命サッカーに取り組むようになって、いいチームになりました」という声をいただきました。結果は惨敗でしたが、他地域の同世代の子どもと交流することによって、自分たちのことを見つめなおし、もっと努力して高めていこうという一つのきっかけになったことは、JCとして期待していたことですし、実施してよかったと思っています。

――なるほど、地域間交流によって、子どもたちも大きな成長を見せたということは一番の成果ですね。

◆酒井　はい。今年度はFC岐阜の協力をいただいて、サッカー教室の開催などもできないかと考えています。岐阜大会の参加チームも増やしたいですし、積極的にPR活動もしていこうと思っています。

JC活動を通じて人間力が磨かれる

――酒井さんご自身のJCへのかかわりを伺いたいのですが、JCに入るきっかけはなんだったのですか？

◆酒井　父もJC活動をしていました。父の友人からも、「お前のお父さんはJCですごく成長したんだぞ」と聞かされたこともあって、子どもながらに憧れを持っていました。社業を継いだらJCに入るのが当然という感覚でした。

――JCに入って、ご自身の変化を感じていますか？

◆酒井　少し柔らかくなったでしょうか。前はもっと我が強かったですね。JCでは、みんなと協力しながら事業を進めていきます。自分だけがという思いでは事業をスムーズに成立させることはできません。メンバーとの融和が大切ですから、協調性は身についたと思います。

――ご自身に変化をもたらしたという意味で、思い出深い事業はありますか？

◆酒井　東日本大震災の翌年である2012年に、土岐JCで宮城県の子どもたちを招いて、野球教室、交流試合、絵付け体験、ホームステイなどの事業を実施しました。参加した子どもの中には、両親も祖父母も亡くして、親せきに身を寄せる子がいました。とてもつらいですよね。でも、その子は明るくて元気でした。被災した後から野球を始めて、「将来は楽天に入団するんだ！」と夢を語ってくれました。この事業は私にとって大きかったと思っています。

東海地区岐阜ブロック協議会
2018年度会長
酒井健吉さん

自らを高め、地域社会に貢献する

――ほかにも、影響を与えた事業はありますか？

◆酒井　土岐JCでは、特別支援学校と年2回交流事業を開催しています。本音を言うと、それまでの私は、支援を必要とする人を見ると、見て見ないふりをするというか、積極的に関わる姿勢はありませんでした。でも、JCを通じて交流することによって、「ああ、すごいな」と見る目が変わりました。作業風景も見せてもらいましたが、とても真似できないほどの素晴らしい集中力でした。この事業も私の人間力向上に大きな影響を与えてくれたと思っています。現在、JC活動を始めて9年目ですが、今後もJCの三信条であるトレーニング・サービス・フレンドシップを基本にしながら、地域社会の貢献に頑張っていきたいと思います。

岐阜県産「鮎」×「ハツシモ」西美濃産

地域の素材にこだわった「あゆせん」

鵜舞屋とJAにしみのがコラボして岐阜県産にこだわった新たな名産品を開発しました。昨年9月に誕生した「あゆせん」は、発売開始からすでに30万枚を突破。株式会社鵜舞屋代表取締役の髙森幹啓さんとJAにしみの代表理事専務の市川浩示さんに開発の苦労話を伺ってみました。

創業明治十年
鵜舞屋うまいや

■問い合わせ
株式会社鵜舞屋
岐阜県岐阜市東鵜1−1
TEL：058−274−0141
http://www.umaiya.co.jp/

地域食材を使うことが地域の発展につながる

「あゆせん」誕生のきっかけについて教えてください。

髙森 ——— 当社では2011年から、「鮎煎餅」を販売していました。「鮎」は岐阜の名産品であることから、2016年からJAにしみのさんでイベントに使用してもらうようになりました。その時に、「岐阜県の原料を使った製品を作っていかないと本当の意味で地域の発展にはつながりませんよ」とアドバイスをいただいたことが、開発のきっかけになりました。当社としては、煎餅の中に鮎が入っているだけで満足していたわけですがJAさんは、地域産に強いこだわりを持っていますから、当社としても単に「鮎」というだけでなく、「岐阜県産の鮎」にこだわった開発をしなければならないという大きなヒントをいただくことができました。

市川 ——— 地域食材にこだわるという意味では、西美濃の代表的な農産物としてお米が挙げられます。その中でも「ハツシモ」は西美濃地域において作付け面積が約7割を占めます。「ハツシモ」を使って、鵜舞屋さんとコラボできないかと考えました。

お客様が必要とするものを作り続けていく

発売からすでに30万枚を突破し、売れ行きも好調のようですが、消費者からはどんな声が聞かれますか？

市川 ——— 最初にハツシモの香りがふわっと漂って、噛みしめると鮎の香りが口の中に広がっておいしい。又、固さもちょうどいいという声をよく聞きます。鵜舞屋さんが1年の期間をかけてじっくり開発された商品だけに、地域性の強い深い味わいになっていると思います。

髙森 ——— 正直、開発途中の試作段階では、時に味が落ちることもありました。「本当に商品化できるのだろうか」と出口が見えなくなる時もありましたが、JAにしみのさんのバックアップによって、地域を代表する名産品になると自負できる製品を開発することができました。当社の開発に対する考え方は、お客様が必要とするものを作る、ことです。JAさんは、お客様に近い位置にいて、お客様が求めているニーズをしっかり把握しています。今回、大きなつながりができましたので、今後も地域や岐阜県を代表する名産品の開発に力を入れていきたいと思います。

コクと旨味、堅さとのバランス

ただ、開発に関しては相当なご苦労があったようですね。

髙森 ——— 大変、ありがたいご提案をいただきました。鮎とお米の相性はバッチリです。「ハツシモ」が入ることでおいしさの改善にもつながると考えました。

さっぱりしながら歯ごたえがあるハツシモの特徴を活かす

岐阜県産の素材にこだわり、その旨味をしっかり表現するために大きな苦労があったというわけですね。

髙森 ——— 今回は、岐阜県産の鮎を使用し、鮎の使用量も増やしました。ただ、鮎を増やせば増やすほど、普段は貴重な栄養素であるオメガ3脂肪酸が過酸化物価作用を起こし、香りがよく味もおいしくなりますが、日持ちさせることと温度管理が難しくなるという問題点が出てきました。また、鮎が強すぎると、ハツシモの風味が表現できなくなります。様々な改良を重ねた結果、開発期間は1年に及びました。

市川 ——— 米の種類は数百種類に及びます。全国的には粘り気のあるコシヒカリ系が消費の多くを占めています。それに比べて、ハツシモは歯ごたえがありながらさっぱりしています。粒が大きく食感があり、お寿司によく合う品種です。そうしたハツシモの特性も煎餅にはマッチしたように思います。粘り気がある米粉だと、また違った開発の苦労があったのではないかと今振り返って感じています。

髙森 ——— はい。以前の「鮎煎餅」では米粉を使用していませんでした。米粉を使うことで、コクや旨味は確実にアップします。ただし、堅くなるというデメリットがあります。米粉の使用量を減らせば堅くならないわけですが、「ハツシモ」の旨味を表現することができません。そのバランスをどうとるかという点で随分苦労しました。

市川 ——— 私たちも全面協力させていただいて、試食は10回以上に及んだでしょうか。鵜舞屋さんも相当苦労されていることが十分わかりましたが、試作を重ねることに、味も堅さもちょうどいい具合に改善されていきました。

髙森 ——— お米のプロの方々にサポートしていただけたのは大きかったです。煎餅を製造してもらうメーカーも、「どうしても米粉を使わないとダメですか」と言ってくるぐらい、米粉を使用すると硬くなってしまいます。開発で行き詰まっていた時に、JAにしみのさんから米粉を作るときの粒度（粒の大きさ）を変更するアドバイスをいただきました。そのアドバイスのおかげで、米粉の割合を減らすことなく、ちょうどいい堅さを出すことができるようになりました。

音楽を通して新しい交流が生まれる

『髙橋真梨子ヘンリーバンド』に参加し、
全国ツアーで多忙な日々を送る
岐阜市出身の野々田万照さん。
21年前、岐阜市に帰郷したことをきっかけに、
地域の文化活動の発展にも力を入れています。

Nonoda Manteru

野々田 万照

音楽をやりたい人はいた。ただ機会がなかっただけ

岐阜市民ＪＡＺＺビッグバンド「楽市ＪＡＺＺ楽団」が結成されて10年を迎えました。きっかけはどんなところからスタートしたのですか？

野々田　21年前、長女の誕生をきっかけに岐阜に帰郷し、住所を岐阜市に移しました。岐阜市は当時、ジャズはもちろん音楽全体への関心度は決して高くありませんでした。どうせ住むなら音楽が盛んなまちに住みたい、盛んでないなら盛んにすればいいと考えました。すぐに学校や病院への出前演奏を始めたのですが、10年前、岐阜市民会館による「ジャズ・ポップス教室」が開催されることになりました。それが思ったより人が集まって、これならバンドが結成されるのではないかと考えて、「楽市ＪＡＺＺ楽団」が結成されることになったのです。やりたい人はいたわけです。やれていなかっただけです。やりたいけど、自分でバンドを作るのは躊躇してしまう。やるきっかけがなかったんでしょうね。

高校生から70歳まで幅広い年齢構成

現在、団員は何名で構成されていますか？

野々田　45人です。高校1年生から70歳まで幅広い年齢構成です。経験者メインと初心者が中心になった2つのチームで編成しています。経験者チームは月1回、初心者チームは月2回の練習があり、そのほかに学校、病院、イベントに出張してほぼ毎月演奏の機会があります。皆さん、普段は学生や社会人ですからスケジュールを合わせるのが難しく、実際のオファーはもっとたくさんいただいているのですが、現状では月1回の演奏で手一杯になっています。

同じ楽器でも音の出し方がまるで違う

10年前と比べて、団員のレベルは向上しましたか？

野々田　うまくなりましたよ。ブラスバンドなどクラシック経験者は結構いるんですよ。前演奏に出かけることも多いのですが、たいてい喜んでもらえます。毎回アンケートをとるのですが、「もっと暗くて大人の音楽だと思っていましたが、今回初めて聴いてジャズの意識が変わりました」と答えてくれた子もいます。出前演奏を聴いて、楽市ＪＡＺＺ楽団のメンバーになった子もいます。それだけ、その子の心に刺さったんだなと思って、私としてはとてもうれしいですね。

他地域のバンドと交流したい

これからの抱負を聞かせてください。

野々田　今までは準備期間だった気がします。これから熟成して、技術ももう少し伸びていくと思います。昔は公共音楽としてジャズは演奏できなかったんですよ。私たちの時代はエレキギターを持っていると不良と言われました。今は、ジャズも市民権を得てきました。同じような活動を続けている他地域のバンドと交流したいですね。もう1つは、昨年、楽市ＪＡＺＺ楽団で、「夢幻～信長と濃姫～」という曲を作りました。今年は楽団のＣＤを発表したいと考えています。可能性は無限にありますので、いろいろなことにチャレンジしていきたいです。

ただ、ジャズは音の出し方が違います。言語みたいなものです。例えばクラシックが英語だとしたら、ジャズはフランス語です。クラシック経験者はどうしてもクラシックの吹き方になってしまいます。それをフランス語に直すのにずいぶん時間がかかりました。最近ようやくコツをつかんできました。合奏ですから、1人でも違った吹き方をしてしまうと、アンサンブルになりません。時間もかかりましたし、根気も必要でしたが、みんなよく努力してくれたと思います。

3年に1度は全員クビになる

10年間続いているメンバーもいますか？

野々田　13人いますね。ただ、3年に一度、オーディションを実施していて、メンバー全員が一旦クビになります。それまでメンバーだった人もすべて新しいオーディションで合格しないと、メンバーになることができません。下剋上ですよ（笑）。3年やると、友達や家族から「今年もジャズフェス出るんでしょ」と言われます。生活の一部になりますし、愛着もわきます。でもオーディションに落ちれば、参加できません。

厳しい世界ですね。次のオーディションはいつですか？

野々田　5月です。中にはビクビクしている子もいるでしょう（笑）。ただ、3年いた人はやっぱり強いですよ。私が伝えたニュアンスをわかっていますから。いくらうまくてもクラシックのニュアンスではだめです。オーディションでは、その部分をじっくり審査します。

アンサンブルが持つ魅力

ジャズの魅力はどんなところにありますか？

野々田　合奏の楽しさですね。環境、育ち、住んでいるところ、年齢、性別がそれぞれ違う人たちが集まって、音量、音色、音程、息継ぎもそろえて1つのかたまりになる。それが合奏の面白さです。私の役割は東京で行われている全国レベルのジャズを岐阜に還元していくことだと思っています。メンバーのみんなにとっては、目からうろこだと感じることが多いはずです。今までとは全然違う吹き方ができるようになります。練習は厳しいですが、新しい発見ができるおもしろさがあるから、みんな続けているのだと思います。

ジャズが持つ暗いイメージを変えたい

岐阜市民の音楽に対する関心度に変化を感じていますか？

野々田　大きく変わったと思います。毎年「ぎふジャズフェスティバル」を岐阜市民会館で開催しますが、約1，000人の観客で賑わいます。昨年は「岐阜市信長公450プロジェクト」もあって、イベントに出る機会も多くて認知度も相当高まったと思います。これまでジャズというと、「暗い」「夜」「タバコ・麻薬」のようなイメージがあったと思います。ジャズが持つ暗いイメージを取り払いたかったので、コンテンポラリーな楽曲を選択するようにしてきました。学校へ出

Super High School Session

スーパーハイスクールセッション

県立のスーパーハイスクール9校から意欲のある生徒たちが集まり、互いの研究成果を生かして連携し、自発的で自由なアイディアを出し合いながら、新たな事業展開につなげられる取組を実施。

スーパーグローバルハイスクール（SGH）
グローバルな社会課題、ビジネス課題を発見・解決できる人材の育成に取り組む高校
●大垣北高校　●岐阜商業高校　●関高校　●多治見北高校　●斐太高校

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）
将来の国際的な科学技術関係人材を育成するための先進的な理数教育を実施する高校
●恵那高校　●岐阜農林高校

スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）
高度な知識・技能を身に付けた専門的職業人の育成を図る先進的な取組を行う高校
●大垣桜高校　●岐阜工業高校

参加生徒 30人（9校）

場所 岐阜大学

SSS

各グループの課題（テーマ）

1班 Sustainable Tourist Spots Development ～持続的に客を呼び込む観光作り～
2班 岐阜市を観光名所にするには ～高校生が隠れた名所を発見～
3班 バス事業の現状 ～高齢者が利用したくなるバスへ～
4班 岐阜を知る ～県民の県民による県民のための情報サイト～
5班 廃校イノベーション ～食と人から岐阜を知る～

第1回

Super High School Session（SSS）報告
日時／7月2日（日）
午前10時～午後3時40分

❶有識者による講演

岐阜県商工労働部労働雇用課
管理調整監　清水 浩二 様
「データから見た岐阜県の特徴と課題」

多治見まちづくり株式会社
ゼネラルマネージャー　小口 英二 様
「『まちづくり』を自分の仕事に」

❷グループ研究

岐阜大学教育学部の加藤直樹教授からアドバイス。

参加生徒の感想

○自分たちの住む「岐阜県」を、改めて客観的にデータで見たが、知らなかったことや誤って認識していたことが多くあった。現状を知ることにより、午後のグループ活動で、岐阜の課題・問題についてより深く話し合うことができた。

○街を活性化するための会社で働いていらっしゃる方の話を聞いて、県や市町村をよくするための方法はたくさんあり、いろいろな人が関わっていることが分かった。また、自ら考えて行動するという当たり前のことの大切さを学ぶことができた。行動することが、全ての研究のスタートであると思った。

○最初は緊張したけど、大学生の方がアイスブレイクをしてくださったので、すぐに仲良くなり、とてもよい雰囲気の中で意見交換ができ、楽しかった。また、課題を絞っていく段階でも、大学生の方に手助けしていただけたので、うまく話を進めることができてよかった。

第2回

Super High School Session（SSS）報告
日時／7月28日（金）
午前10時～午後3時40分

❶プレゼンテーション講習会

日本福祉大学国際福祉開発学部 教授 影戸 誠 様
「効果的なプレゼンテーションとは」

❷iMovieによるビデオ制作のために

岐阜大学教育学部の加藤直樹教授から動画や画像の編集について説明。

❸グループ研究

❹グループ課題の発表

岐阜大学の地域協学センターの先生方からアドバイス。

参加生徒の感想

○プレゼンテーションにおける大切なポイントを多く教えていただきました。パワーポイントの作成に力を入れるばかりでなく、表情をしっかり作ることや話す技術・語りかける技術も大切だと分かりました。プレゼンテーションは“See Show Speak”。

○みんなそれぞれが調べた情報を持ち寄って、深い話し合いができた。しかし、課題発表のとき、大学の先生にいろいろ指摘いただき、まだまだ詰めが甘い点があると分かったので、またグループで話し合っていきたい。

○同じ課題でも人によって見方が異なり、様々な意見を聞くことができ、自分の中でも新しい発見があり、とっても面白かった。次回までに現地調査やインタビューを行って、話し合いに参加したい。

第3回

Super High School Session（SSS）報告
日時／8月20日（日）
午前10時～午後3時30分

●グループ研究

「岐阜県の活性化～地域の課題を発見し、解決策を提案しよう！～」をテーマに企画書を作成。

参加生徒の感想

○パワーポイントをただ一人で作るのではなく、みんなの意見を聞きながら進めることができてよかった。また、発表原稿の作成も、直した方がよい点や付け足したらよい言葉などをみんなで出しながら進めることができてよかった。大学生の方のアドバイスも的確でとても助かった。

○私はみんなより発言が少なくあまり活躍できていなかったが、今回は自分の得技をパソコンでの画像の製作で生かすことができた。

○先日、グループのみんなで集まって岐阜バスの本社に取材に行きました。質問事項を事前にみんなで考えて準備していったので、スムーズに取材を進めることができました。
今日は、その内容を基に、今までの案を見直すことができてよかったです。

第4回

SSS・アイデアコンクール 報告
日時／8月22日（火）
グループセッション 午前10時～正午
アイデアコンクール 午後1時30分～午後4時

●アイデアコンクール

地域の課題を解決するために練り上げたアイデアを各グループが発表。発表後、質疑応答と最優秀賞、優秀賞の発表。

参加生徒の感想

○異なる地域・高校の生徒が集まったからこそ、新たな岐阜県の活性化のためのアイデアがたくさん出たと思う。
短期間の活動だったけれど、最後、しっかりと県や市町村への提案をまとめ、発表できてよかった。

○どの班も自分たちで足を運んで調査した正確な情報を基にした提案で、とてもよかった。
各班の高校生にできることの提案の内容は、本当に自分でもできそうなことばかりで、やってみたいと思った。

○他のグループの発表は、自分たちのグループに無かった発想や提案があり、とてもよい刺激になった。
何より、自分の知らない岐阜県の部分について知ることができてよかった。

東京オリンピックで金メダル

～夢に向かって挑み続ける～

2020年東京オリンピックでは
空手道が正式種目に採用されました。
オリンピックで金メダルをとることを目標に、
日々厳しい練習に取り組んでいるのが、
世界空手道選手権4連覇を達成し、
ギネス世界記録を持つ西濃運輸空手道部監督の
若井敦子さんと主将の新馬場一世さんです。
オリンピック出場に向けて、
しっかり結ばれた深い絆で挑むお二人を紹介します。

勝つ秘訣は勝てるまでやり続けること

若井監督は選手時代も数々の素晴らしい実績を残されてきたわけですが、そんな監督の指導を受ける新馬場選手は、ご自身の変化をどのように感じていますか？

●新馬場　監督の指導を受けて6年になりますが、空手人生が変わりました。昔お世話になった先生からも、「よくなっているな」と毎年声をかけていただけます。周囲からも成長したと認めてもらえるのは大変うれしいことです。成績も上がっていますから、技術も伸びたと思いますが、何より人として成長できたと実感しています。

●若井　昨年からチームの主将を務めてくれているのですが、立派に主将の務めを果たしてくれています。昨年1年間で技術もそうですし、人間的にも大きく成長してくれたと思います。

若井監督から指導を受ける中で印象に残っている言葉はありますか？

●新馬場　「できないのではなく、できるまでやっていない」です。以前の私は、頭の中で、「これ以上できない」と思って、あきらめていた部分がありました。でも、監督の指導を受けて変わりました。できないことはないと思えるようになりました。日々の練習も自分が納得できるまでとことん突き詰めるようになりました。

●若井　あきらめが早いんですよ（笑）。できないのではなく、できるまでやっていないからできないのです。勝つ秘訣は、勝てるまでやることです。

●新馬場　後輩を見ていると、かつての自分を思い出します。「できるのに、なぜもっとやらないんだろう？」。そう思えるようになったのも、監督の指導のおかげです。

国体で優勝を飾った翌日に、突き放される

新馬場選手が変わるきっかけになった転機は、いつだったのでしょうか？

●若井　彼が入部した年、２０１２年にぎふ清流国体が開催されて、彼は国体初優勝を飾りました。でも、内容は散々たるものでした。それに気が付かず、優勝したことに浮かれていては、彼の空手人生はここで終わってしまうと思いました。それで彼を切ったんです。このままの新馬場ならば「もう指導はしません」と。私は勝負をかけて彼を試しました。

優勝したのに突き放されるとは厳しいですね。新馬場選手にとっては、「えっ！なんで？」という感覚ではなかったのですか？

●新馬場　その時初めて、人としてのふるまいがなっていなかったことに気づきました。1週間ぐらい熟慮して、「もう一度お願いします」と頭を下げました。

●若井　そこからは、伝えたいことがストレートに伝わるようになりました。彼を最初に見た時、本当に世界を狙える選手だと思いました。ただ、スポーツはよく心技体といわれますが、技術はもちろん必要で、それに見合う体力も必要です。そして何よりも強靭な心が必要です。人間力なくして、競技力向上なし。これは私自身が身に染みて感じてきたことです。彼を見て、心の部分が足りない。人としての器が小さければ吸収できるものも小さい。器を大きくする必要があると思ったのです。あれ以来、目を見張るような成長を見せてくれています。

世界3位でも出場できない分厚い壁

東京オリンピックまで、あと2年。ずばり出場の見込みはどうですか？

●若井　現在、彼は世界ランク3位です。出場選手枠は10で、世界ランキング4位までは選出されます。普通なら出場できるはずですが、現在のランキング2位は日本人の喜友名諒選手です。1カ国で出場できるのは1人と決まっていますから、世界ランク3位でありながら、現在のままでは出場することができないのです。

厳しい世界ですね。

●若井　はい。昨年12月、全日本空手道選手権大会が行われました。5年連続同じカードで、彼は5年連続で準優勝、喜友名選手が6連覇を飾りました。国際大会でもだれにも負けない彼がただ唯一、喜友名選手だけに負けているのです。

監督を超えることが、最高の恩返しになる

大変厚い壁ですが、喜友名選手を超えたいですね。

●新馬場　はい。ただ、昨年も負けましたが、気持ちは大きく変わっています。以前は負けているのでライバル視する気持ちが強かったです。もちろん今でもライバルに変わりはないのですが、昨年は尊敬と感謝の気持ちをもって戦うことができました。自分のレベルが向上したのも喜友名選手の存在があるからです。そこに気づかせてくれたのが監督です。

●若井　彼の気持ちはよくわかるんです。自分も通ってきた来た道ですから。5年間負け続ける。普通ならあきらめますよ。精神的にも相当こたえるはずです。でも１００回戦って負けるかもしれないけど、１０１回目で勝てるかもしれません。彼は決してあきらめません。昨年の全日本選手権大会も優勝を逃しましたが、試合内容は充実していました。ここに来て、伸びるベクトルがグンと上がっています。平日は仕事が終わってから夜遅くまで稽古、休みの日も朝から晩まで稽古。道場で黙々と自分の技を研究し、反復練習しています。そんな姿を見ていますから、なんとか彼の夢をかなえてあげたいと思っています。

新馬場選手、ぜひ夢をつかんでください。

●新馬場　はい。私にとって、空手は自分らしくいられる、自分と向き合える存在です。試合は、今までやってきた練習だけでなく、私生活のすべてが出るものだと思っています。監督は世界選手権４連覇をされていますが、オリンピックが正式種目に採用されていなかったので、オリンピックの金メダルはありません。監督を超えることが、最高の恩返しになると思っています。これからも夢に向かって挑み続けたいと思います。

ぜひ頑張ってください。これからも応援しています。本日はありがとうございました。

地域おこしの起爆剤として
注目度を集める山里育ちの

近畿大学で生まれた稚魚を、
飛騨のミネラル豊富な地下水を利用し、
大きく育てたものが「飛騨とらふぐ」。
コリコリ感と甘みたっぷりの身がおいしいと評判で、
飛騨とらふぐを目当てに遠方から
足を運ぶ人が増えています。
海のない岐阜県発の飛騨とらふぐの
魅力を紹介します。

趣味からスタートした養殖事業

飛騨とらふぐの養殖を手掛けるのは、飛騨海洋科学研究所の深田哲司さんです。介護やアパレル関係に従事してきた深田さんは、実は大の釣りキチ。魚を飼うことに昔から興味があり、釣り好きだったこともあって、「釣り堀を作ってみたい」「養殖にもチャレンジしてみたい」と〝遊びのレベル〟で始めたのが9年前でした。始めてみると、鯛や鮮の養殖は思いのほか順調に行きました。ただ、海の養殖と異なり、陸上養殖は設備の導入費用や電気代などのコストがかかるため、採算ベースには合いません。そこで取引価格が比較的高いとらふぐの養殖に挑戦することになりました。

試行錯誤の日々が続いた苦難の3年間

しかし、ここからが苦難の連続。3年間、成果が出なかったのです。それでも、深田さんの挑戦は続き、水質に問題があることを発見。開発当初は100匹育てて1匹育つかどうかというレベルだったものが、現在は歩留まり率7割にまで引き上げることに成功。2013年から本格的な出荷をスタートさせています。とらふぐの養殖は成功例がほとんどありません。それでも独学で生きてきたという深田さんの探求心が揺らぐことはなかったそうです。「成功例がないわけですから、聞く人がいないわけです。私自身の考え方も日々変わります。『今度は、この方法で試してみよう』という試行錯誤の日々でした。トンネルを手で掘っているようなものでした」と当時を振り返ってくれました。

飛騨とらふぐで地域おこしに貢献したい

現在、飛騨とらふぐを食べることができる店舗は飛騨市内に8店舗。昨年、KITTE名古屋内に飛騨とらふぐを食べることができるお店がオープンしましたが、基本的には飛騨市内だけに限定しています。これまでも百貨店などからの問い合わせもあったそうですが、丁重にお断りしているそうです。そこには、「飛騨市に足を運んで食べてもらいたい。飛騨とらふぐによって、飛騨の交流人口が増えることにつながれば」という、地域おこしに貢献したいという深田さんの思いがあるからです。

おいしさの秘訣はストレスのない環境

飛騨とらふぐの魅力は、コリコリした食感と甘みにあります。生体分子計測研究所による、おいしさ分析結果報告書では、他県のとらふぐよりはるかに高く、数値でも実証されています。おいしさの秘訣は企業秘密ということで、詳細は紹介できませんが、ストレスを与えないことを心がけているそうです。元々、とらふぐは真っ白の魚です。でも、ストレスを与えると体中に血が回り、赤く染まります。とらふぐは獰猛というイメージもあるようですが、深田さんのところで育てられているとらふぐは、とても人懐っこいです。養殖している水槽を案内してもらいましたが、深田さんが寄っていくと、とらふぐも心地よさそうに泳ぎながらスーッと集まってきます。ストレスの少ない環境で育てることで、人が近寄っても逃げたりせず、逆に近寄ってくるのです。そのため、身は透けるように白く、甘みたっぷりのプリプリした、とらふぐとして成長するのです。

生まれも育ちも飛騨のとらふぐを開発したい

開発から9年を経過し、飛騨とらふぐを目当てに飛騨市を訪れる観光客は着実に増加を見せています。その変化は、開発当初「ここまで注目されるとは思ってもみなかった」と語る深田さんの想像を超えています。近年は赤潮の大量発生による被害が大きく、養殖業者が減少しています。そのため、とらふぐの陸上養殖に成功した深田さんのもとには多くの問い合わせが寄せられています。現在、近畿大学で生まれた稚魚を育てていますが、深田さんはすでに孵化試験も始めています。生まれも育ちも飛騨の山と呼べる飛騨とらふぐを開発するべく、深田さんの研究はこれからも続いていきます。

株式会社飛騨海洋科学研究所
深田哲司さん

■問い合わせ

株式会社
飛騨海洋科学研究所
飛騨市古川町是重2-2-8
TEL:0577-73-7006
http://hidatorafugu.com

ココロが通う
田舎暮らし

伊自良湖へ向かって、のんびり車を走らせると柿渋染め商品を扱う「柿ZANMAI」があります。神奈川県から山県市に移り住んで4年、山県市に来て出会った奥様と結婚し、2人のお子さんにも恵まれて、にぎやかな毎日を送る金子さん家族の暮らしぶりを紹介します。

柿渋を活用したアイテムの開発に夢中
いつかは県を代表する特産品へ

子どもを育てるなら田舎で育てたい

取材当日は、お子さんがインフルエンザにかかってしまい、残念ながら奥様とお子さんのお顔を拝見することができませんでしたが、金子さんは4人家族。柿渋染め商品の工房兼店舗である「柿ZANMAI」の近くに一軒家を借りて暮らしています。

金子さんが山県市に移住したのは4年前。それまでは出身地である神奈川県の大手アパレルメーカーに勤務していました。「仕事は充実していました。でも、幸福感は感じていませんでした。幼少時代の地元は、まだまだ田舎で、山や川で遊んだ記憶があります。でも、今は開発が進んで住宅街になりました。もっと自然にふれたい、人間らしい生き方がしたいと思って、長期休暇の度に自然の豊かなまちへ出かけるようになりました」と金子さん。その頃から、「家庭を持って、子どもを育てるなら田舎で育てたい」と思うようになったそうです。

4年前、山県市では柿渋を活用した特産品開発の担い手を募集しました。「自分がやりたいと思っていたこととマッチした」という金子さんは地域おこし協力隊に応募し、山県市に移住することになりました。

約50年前に途絶えた柿渋の復活と活用

柿渋の原料になる伊自良大実柿は伊自良北部にしか存在しない珍しい柿で、飛騨美濃伝統野菜にも認証されています。現在は、すだれのように吊り下げて干す"連柿"が冬の風物詩として注目を集めていますが、50年ほど前までは食用としての干し柿よりも、柿渋を使った染めにも大きな需要がありました。和傘や魚網などに柿渋を塗ることで強度が増すことから、利用される機会が多かったそうです。しかし、化学製品の登場により行き場を失っていました。

地域の宝「伊自良大実柿」を守っていきたい

現在、伊自良大実柿を栽培する農家は約30軒。しかし高齢化が進み、担い手不足は深刻です。金子さんは、「地域の宝である伊自良大実柿を大切に守り、受け継いでいきたい」との思いから、「伊自良大実柿連合会」を立ち上げ、放置されている柿の手入れに協力するとともに、新たな栽培にも力を入れています。

Made in gifuの生活雑貨品

柿渋は"最強のタンニン"とも呼ばれ、その含有量はワインの約20倍といわれます。抗酸化作用に優れ、消臭・抗菌作用もあるとされることから、近年はシャンプーに使用されるなど商品化が進んでいます。金子さんの元には、柱や壁などの建材に柿渋を塗ってほしいという住宅会社からの塗装依頼がすでに届くなど、新しいニーズも着実に広がっています。

中でも金子さんが力を入れているのが、柿渋染めを活用した生活雑貨の開発です。県内の紡績工場と協力関係を結び、靴下、タオル、枕カバーなど様々な柿渋染めアイテムにチャレンジ。「山県市の伊自良大実柿と岐阜県の紡績技術という岐阜でしかできない商品を開発して、地域おこしにつなげていきたいです」と語り、これから目指す大きな夢に思いをはせています。

自分らしく生きられる場所

「最初、この平井地区に来て案内してもらったのが、柿畑でした。冬で実もすっかり落ちていましたが、四方を柿の木に埋め尽くされた風景に感動しました。あの光景が大好きで、そのときに感じた想いは今も忘れることがありません。昔は、柿の木ももっと多くて、最盛期になるとこの地域一帯がオレンジ色に染まったそうです」と金子さん。第2のふるさととして選んだ平井地区では、地域にもすっかり溶け込んでいます。「みなさん本当に暖かく迎え入れてくれて、平井のお父さんと慕う頼れる存在もいて、とても居心地よく暮らせています」とのこと。住民からも伊自良大実柿の伝承はもとより、地域のこれからを支える貴重な若手人材として大きな期待も寄せられています。

柿を活用して新しい産業を生み出したい

「まるで親バカですが、伊自良大実柿が大好きなんです。干し柿でも、うちの柿が一番おいしいと本気で思っています。担い手を増やすためにも、ここにもっと人を呼びたいんです。そのためには雇用を作らないといけません」と金子さん。柿を活用して新しい産業を生み出す。金子さんのチャレンジはまだまだ始まったばかり。金子さんの夢に向かっての挑戦する姿をこれからも見守り続けていきたいと思います。

柿ZANMAI

岐阜県山県市平井51-5
TEL:090-7225-9606
http://kaki-zanmai.com/

講演会・セミナーのご案内

特定非営利活動法人 ぎふ・プロジェクトネットワークでは、
様々な分野でご活躍の講師による講演会・セミナー・勉強会をご紹介しています。
毎日の暮らしに役立つ幅広いジャンルの講演会・セミナーを開催することができます。

お気軽にお問い合わせください。

金融機関、葬儀社などでのセミナーや、行政書士会や司法書士会、日本ＦＰ協会など専門家向けの支部研修など年50回を超える講演実績があり、「お金の終活（すばる舎）」の著者でもあります。

なごみ行政書士事務所
なごみ相続サポートセンター 所長 **山田 和美**さん

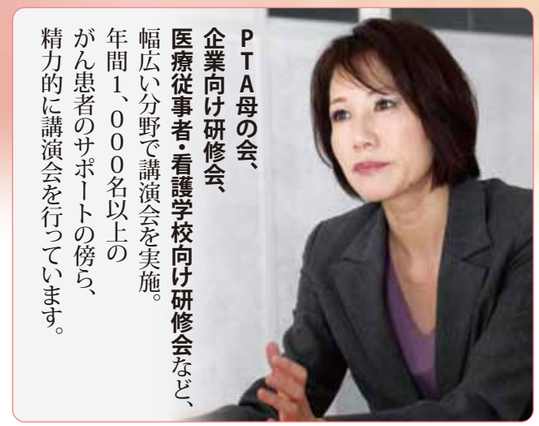
【講演概要】

「相続」を「争続」にしないために、
そして後悔のない「終活」のために

- 超高齢化社会の中、相続に関する問題を抱えている人が増加しているにも関わらず、「相続で困るのは一部のお金持ちだけなので、うちは関係ない」と自己判断している人が多いのが現状です。
- その結果、家族が争ってしまったり、手続きが煩雑になってしまったりするケースが散見されます。
- 生前元気なうちであれば、ほとんどの問題に対して策を打つことは可能であり、その対策法をお伝えします。

プロフィール

1986年愛知県稲沢市生まれ。大学卒業後、名古屋市内の名南コンサルティングネットワークに就職。相続手続・遺言作成サポート業務を専門に行った後、税理士法人に転籍し、2014年3月、愛知県一宮市で独立開業。税理士、司法書士など各専門家とチームを組み、総合的な相続サポートを行っている。相続に関する相談は、年100件を超え、講演は年間50回ほど行っている。「お金の終活」（すばる舎）著者。



PＴＡ母の会、企業向け研修会、医療従事者・看護学校向け研修会など、幅広い分野で講演会を実施。年間１、０００名以上のがん患者のサポートの傍ら、精力的に講演会を行っています。

NPO法人
テッテルーチェ 理事長 **加藤 千恵子**さん

【講演概要】

「がん」を正しく知る。
そして「がん」から命を救う食事と生活術を理解する。
～健康プロジェクト～

- 日本人の2人にひとりが「がん」にかかる時代ですが正しい知識を知る機会はほとんどありません。そこで「がん」は誰にでもかかる可能性があることを意識づけ、「がん」健診率の向上を目指します。
- 自分が「がん」になったらどう対するのか、人生や生活について考えるきっかけを作ります。
- 「がん」に対する知識を得ることにより、むやみに怖がったり、誤解や偏見をなくしていきます。

プロフィール

2010年9月に左乳がんになり、翌月、皮下乳腺全摘出同時再建手術を行う。がんになり失意と絶望の中、病院探しに難航した経験から、同じ経験を持つ人を救いたいと乳がん患者会を設立し、現在は月5回の患者会、全国無料相談会、イベントや講演会を通し年間1,000名以上の患者サポートを行っている。がんになって学んだことは、限りある命を愛うのではなく、健康であることのありがたさ、人への感謝の気持ち、チャレンジする精神などであり、これらを講演を通して多くの方に広めている。

お問い合わせ **講演会については、お気軽にご連絡ください。ご説明をいたします。**

特定非営利活動法人 ぎふ・プロジェクトネットワーク
Tel:058-237-6222 Fax:058-237-7509 または E-Mail:info@gifu42.net までご連絡下さい。
〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-20-3

三田洞弘法

地域に身近な“三田洞の弘法さん“やすらぎあふれる環境の中、イベント会場としても開放

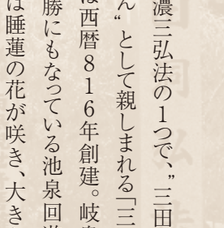
美濃三弘法の1つで、“三田洞の弘法さん“として親しまれる「三田洞弘法」は西暦８１６年創建。岐阜市指定名勝にもなっている池泉回遊式庭園には睡蓮の花が咲き、大きな鯉が泳ぎ、ゆったりと散策しているだけで心がホッと癒されます。さくら、新緑、もみじなど四季を通じた境内の美しさは見事で、四季を通じて楽しむことができます。また弘法大師が植えたという菩提樹があり、岐阜市天然記念物に指定されています。

境内の建物は本堂のほかに不動堂、太子堂、鐘楼、稲荷堂、庫裡と優雅な茶室を備え、庫裡では、菜めし、でんがく、精進料理などを味わうことができます。日常の喧騒を忘れさせてくれる落ち着いた雰囲気の中、のんびりとしたひとときを楽しむことができます。

すぐ近くには、岐阜市の温泉施設である「三田洞神仏温泉」や、「ながら川ふれあいの森」もある自然豊かな場所です。森林浴やハイキングに親しんだ後、美しい庭を眺めながら菜めし、でんがくに舌鼓を打ち、温泉でリフレッシュ。心身がリフレッシュできる一日が過ごせそうです。

“弘法さん“をもっと身近に感じてほしいという林清弘住職の思いから、ミニコンサートや講演会、講習会など自由に使っていただけるイベント会場としても開放。心地よい風が流れ、美しい四季折々の景観が目を楽しませてくれる、いつもとは少し雰囲気の違うイベント開催の拠点としてもご活用ください。

イベントコンサート風景



岐阜市三田洞131
TEL.058-237-3812
FAX.058-237-7480

【アクセス】
JR岐阜駅または
名鉄岐阜駅から
岐阜バス
■岐阜高富線
■茜部三田洞線
「三田洞」下車、
徒歩10分
駐車場あり

お昼のお食事

◇でんがく・菜めし・小鉢・汁物 800円
（火曜・水曜は休み。祝日の場合は利用できます）
◇精進料理 2,000～3,000円（要予約）

東京岐阜県人会

～ 平成29年度総会・懇親会を開催 ～

吉村会長の挨拶

平成29年11月21日（火）午後6時から、千代田区飯田橋（九段下）のホテルグランドパレスにおいて、東京岐阜県人会平成29年度総会及び懇親会が開催されました。
総会では、吉村会長から「現在、東京岐阜県人会では、多くの若い方に入会いただきたいと考えている。本日ご来場の皆様にも、当会の素晴らしさを周りの若い人に教えてあげて欲しい」との挨拶がありました。

総会開催後の午後6時30分からは、恒例となった懇親会を開催。県人会会員のほか、古田岐阜県知事や村下岐阜県議会議長、県選出国会議員や県内市町村長など、総勢約260名もの岐阜県ゆかりの方々が集い、盛大な会となりました。

今年のメインゲストは、平成28年の第4回津軽三味線全国大会で優勝されました、関ケ原町ご出身の津軽三味線奏者･野村恭文さん。当日は、津軽じょんから節や秋田荷方節をご披露いただき、会場は大変盛り上がりました。「東京オリンピックの開会式で千人大合奏を実現したい」との野村さんの夢を是非とも後押ししたいものです。

今年も会場となるホテルには、特別に岐阜県産の食材を使った料理を沢山提供していただき、加えて飛騨牛のローストビーフ（馬喰一代提供）にみたらし団子、五平餅、ボーノポークジャーキーなどを持ち込み、例年に負けない郷土色豊かな料理や地酒が振る舞われました。県産品の販売コーナーには、県下各地の特産品が並べられ、県出身者の郷愁を誘い相変わらずの盛況さでした。地元市町村からいただいた富有柿、お米、お茶等をお土産に午後8時30分、余韻を残しながら懇親会はお開きとなりました。

まだ総会･懇親会に参加されたことのない方は、是非来年度はご参加ください!

古田知事による来賓あいさつの模様

野村さんによる三味線演奏

ご来賓の市町村長他の方々

東京岐阜県人会入会のご案内

東京岐阜県人会は、岐阜県の食や文化、会員同士のつながりを大切にし、楽しい各種活動を行っています。また、この会をきっかけに様々な人的ネットワークも構築できます。

先ほどご紹介した東京岐阜県人会懇親会で演奏いただいた津軽三味線奏者･野村さんは、会場に居合わせた市長さんの目に留まり、早速次の活動の道も拓けたそうです。

会の主な活動は、総会や懇親会といった会員全体が集まる活動のほか、会員会報誌「ギフネット」の発行、ゴルフや囲碁などの趣味の会、女性だけで活発な活動を行うレディース倶楽部などなど…。

年末には若手会員増に向けたクリスマスパーティーも開催するなど、様々な活動を展開しています。ぜひ皆さんもお知り合いの方をご紹介ください!よろしくお願いします。

東京岐阜県人会入会のご案内

個人会員 年会費2,000円　法人会員 年会費30,000円

入会案内
http://apgifu.net/information.html

お問い合わせ
gifukenjin-tky@poppy.ocn.ne.jp

東京岐阜県人会HP
http://apgifu.net/

協力団体･組織

特定非営利活動法人**ぎふ･プロジェクトネットワーク**は、
多くの団体･組織の皆さまによるご支援の下、活動の輪を拡げています。

岐阜県庁	岐阜県教育委員会
岐阜県市長会	岐阜県町村会
岐阜県商工会議所連合会	岐阜県商工会連合会
日本青年会議所	岐阜県観光連盟
岐阜観光コンベンション協会	岐阜県市町村振興協会
岐阜県医師会	岐阜県歯科医師会
岐阜県薬剤師会	岐阜県信用保証協会
十六銀行	大垣共立銀行
岐阜信用金庫	関信用金庫
東濃信用金庫	大垣西濃信用金庫
岐阜商工信用組合	岐阜県弁護士会
岐阜県中小企業団体中央会	ＪＡ全農岐阜
岐阜県キャンプ場連絡協議会	岐阜県旅館ホテル生活衛生同業組合
ＦＣ岐阜	岐阜県の道の駅
岐阜県レクリエーション協会	東京岐阜県人会

アンケートプレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方に、抽選で
よりよい誌面づくりのために、アンケートにご協力下さい！**「5名様にquoカード1,000円分」をプレゼント!**

【アンケート項目】
1. 「Genki! ぎふ」第5号（vol.5）をどこでご覧になられましたか
2. 興味を持った記事はありましたか。掲載ページでお答え下さい
3. どのような理由で興味を持ちましたか
4. 興味の持てなかった記事はありましたか。掲載ページでお答え下さい
5. どのような理由で興味が持てませんでしたか
6. 今後とりあげてほしい情報があればご記入下さい
7. 感想をご自由にお書き下さい

【応募方法】
「官製はがき」か「E-Mail」にてお送り下さい。
・質問の○数字の後に、その答えをご記入下さい。
・返信には、郵便番号、住所、氏名、年齢、性別を必ずご記入下さい。

■官製ハガキにてお送りいただく場合
送付先：〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1丁目20番3号
NPO法人 ぎふ･プロジェクトネットワーク　本部事務局 宛て

■E-Mailにてお送りいただく場合
送付アドレス：info@gifu42.net　まで

□**応募期限:2018（平成30）年5月5日（到着分）**
当選者発表は、プレゼント品の発送をもってかえさせていただきます。

※皆さまからの個人情報は、よりよい誌面づくりとプレゼント発送のためにのみ使用し、それ以外には使用をいたしません。